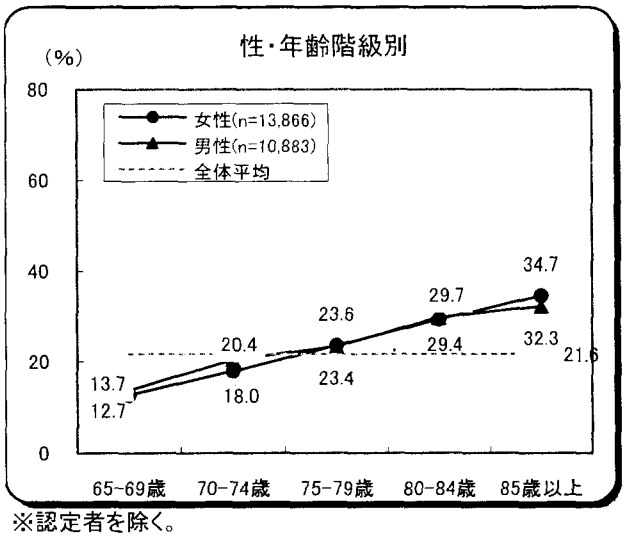
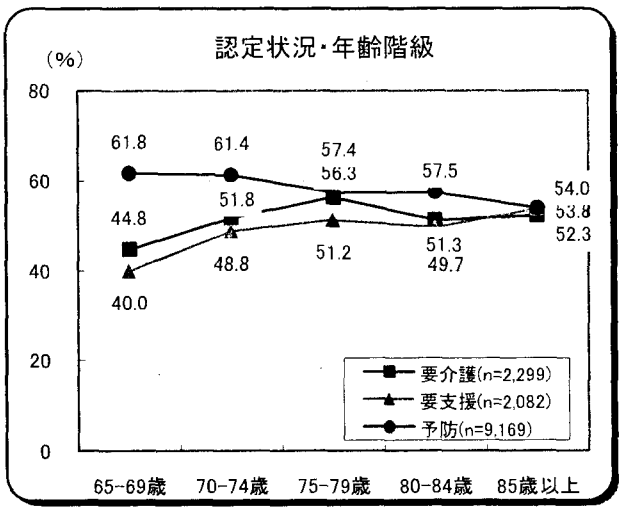
(5) 口腔

①該当状況

●基本チェックリストに基づく口腔に関する評価結果をみると、認定者を除く全体の該当者割合は21.6%（男性21.6%、女性21.7%）となっており、年齢が上がるほどその割合は高くなっているものの、栄養と同様、男女差は比較的小さな項目となっている。
●二次予防対象者と認定者の該当者割合を比較すると、二次予防対象者58.9%に対し、要支援認定者50.9%、要介護認定者52.3%と、二次予防対象者が最も高くなっている。
●二次予防対象者全体に占める口腔の該当者は、運動に次いで多く、介護予防事業では通所型の事業が中心になると考えられる。

図表　該当者割合（性・認定状況・年齢階級別）





※認定者を除く。

②回答状況

●評価の基礎になった設問に対する回答結果を認定者と比較してみると、各設問における認定者の該当率は49.4%～65.7%、非認定者の非該当率は62.8%～78.8%と、高齢者の生活機能のレベルを示す指標として有効なことがうかがえる。
●関連する設問についてみると、問4-3は、内容的に問4-4と重なることもあり、ほぼ同様な結果となっているが、問4-7～9については、認定者と非認定者で顕著な差はみられない。

図表　回答結果

単位：%

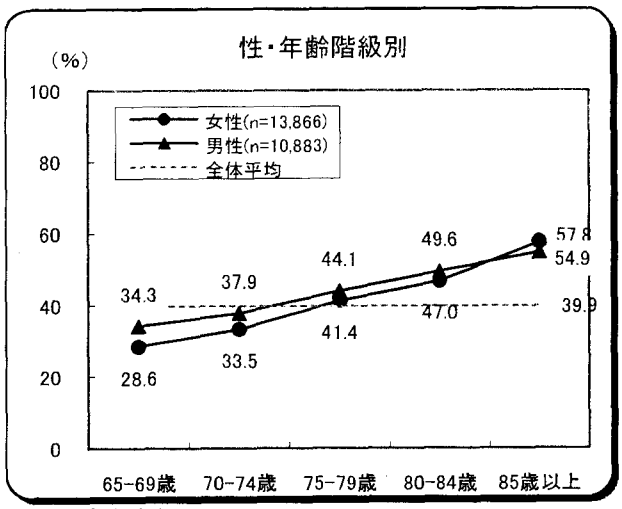
設問（該当する回答）	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)		特異度
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)	
問4-4　半年前に比べて固いものが食べにくくなりましたか（はい）	37.2		65.7		(62.8)
	20.6	64.8	63.2	68.1	
問4-5　お茶や汁物等でむせることがありますか（はい）	21.2		49.4		(78.8)
	7.5	44.3	45.5	53.0	
問4-6　口の渇きが気になりますか（はい）	25.3		49.6		(74.7)
	8.7	52.9	50.3	48.9	
＜関連設問＞					
問4-3　固いものが食べにくいですか（はい）	45.4		74.5		(54.6)
	31.7	68.5	70.2	78.4	
問4-7　歯磨きを毎日していますか（いいえ）	10.2		21.3		(89.8)
	8.9	12.2	12.2	29.7	
問4-8　定期的に歯科検診を受けていますか（いいえ）	74.5		86.1		(25.5)
	71.6	79.5	84.4	87.6	
問4-9　定期的に歯石除去や歯面掃除をしてもらっていますか（いいえ）	78.1		88.6		(21.9)
	74.9	83.5	87.4	89.7	

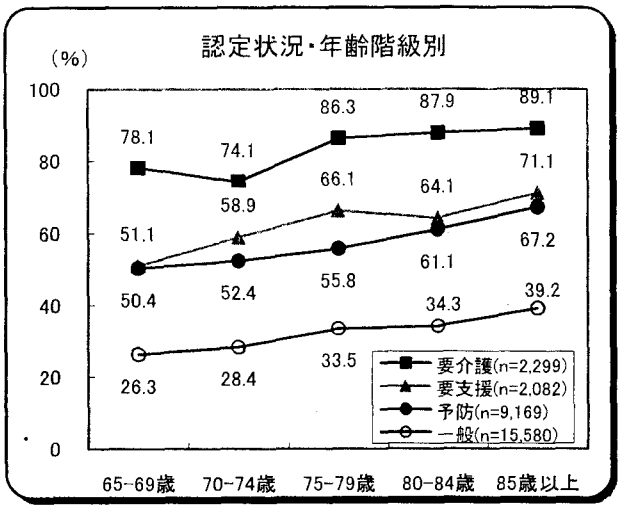
(6) 認知

①該当状況

●基本チェックリストにおける認知症予防の該当状況をみると、認定者を除く全体で39.9%（男性41.3%、女性38.7%）となっており、やはり年齢が上がるほど該当者割合が高くなっているものの、男女差は比較的小さくなっている。
●認定状況別にみると、要支援認定者と二次予防対象者で該当者割合にあまり差がないことが特徴的になっている。

図表　該当者割合（性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別）





※認定者を除く。

②回答状況

●設問に対する回答結果を認定者と比較してみると、認定者の該当率は47.8%～59.5%、非認定者の非該当率は73.8%～90.2%で、高齢者の生活機能のレベルを示す指標として有効なことがうかがえる。要支援と要介護の認定者で該当率に大きな差があることが特徴的になっている。
●関連する設問である認知症の既往歴については、認定者と非認定者で既往率に大きな差が出ており、特に要介護認定者の既往率が高くなっている。

図表　回答結果

単位：%

設問（該当する回答）	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)		特異度
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)	
問5-1　周りの人から「いつも同じ事を聞く」などの物忘れがあると言われますか（はい）	21.9		56.0		(78.1)
	13.4	36.4	43.2	68.0	
問5-2　自分で電話番号を調べて、電話をかけることをしていますか（はい）	9.8		47.8		(90.2)
	6.4	15.6	25.1	68.7	
問5-3　今日が何月何日かわからない時がありますか（はい）	26.2		59.5		(73.8)
	18.4	39.2	46.6	71.3	

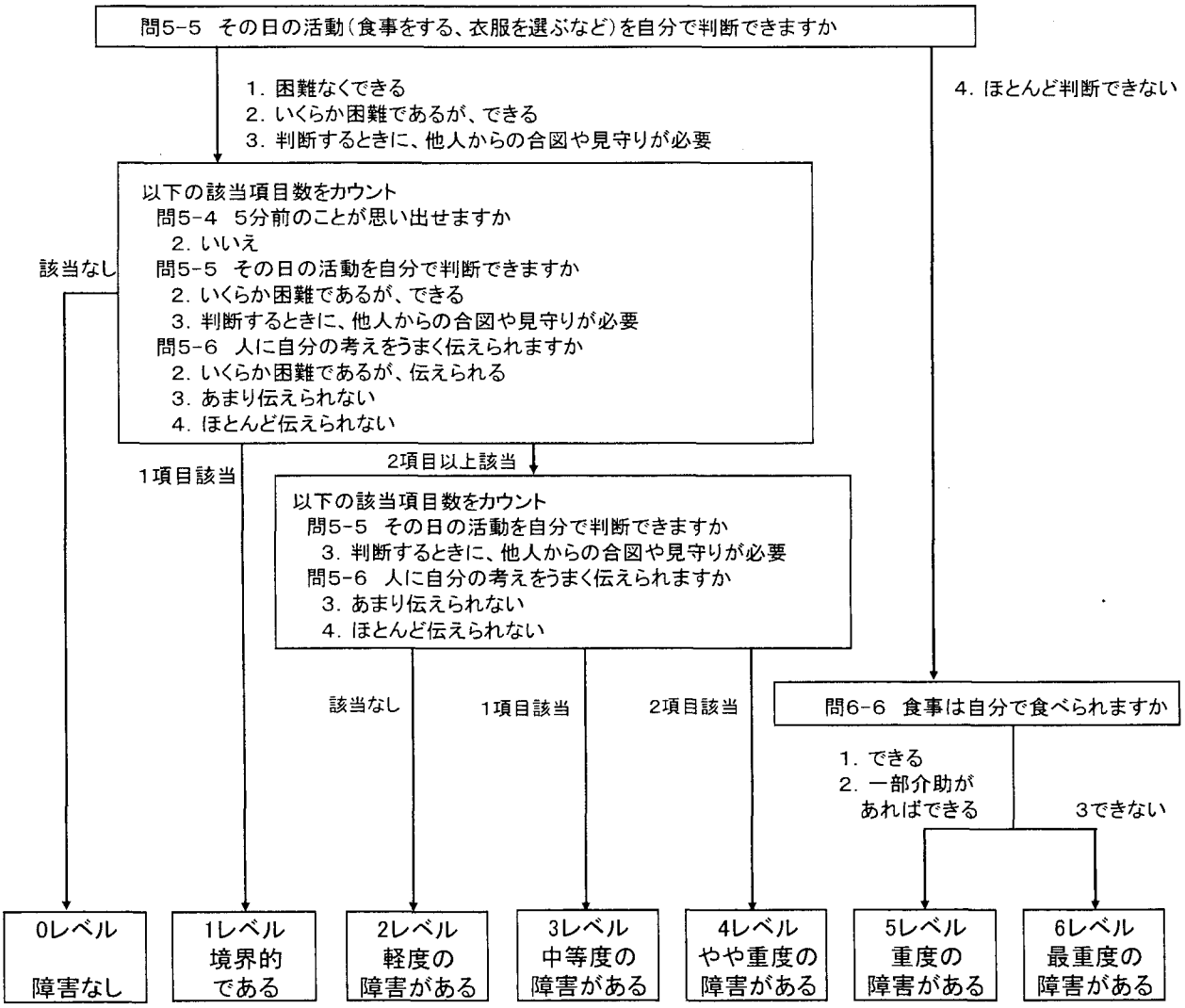
＜関連設問＞

問1-6　これまでにかかった病気はありますか（認知症）	0.6		16.4	
	0.2	1.4	4.3	27.3
問8-2　現在治療中の病気はありますか（認知症）	0.6		13.2	
	0.2	1.3	3.6	22.0

③認知機能障害程度（CPS）
・設問と評価

●今回の調査には、認知機能の障害程度の指標として有用とされるCPS（Cognitive Performance Scale）に準じた設問が含まれている。
●設問としては調査票の問５-４～６及び問６-６で、内容的には要介護認定調査の主治医意見書欄にある内容である。
●本来は観察者による評価がされることにより客観的な指標となるが、今回は自記式の調査ではあるものの、下図にあるように比較的簡易に認知機能の障害程度の評価が可能であることから、調査票に盛り込まれている。
●設問に対する回答内容により、０レベル（障害なし）から６レベル（最重度の障害がある）までに評価が可能となっている。

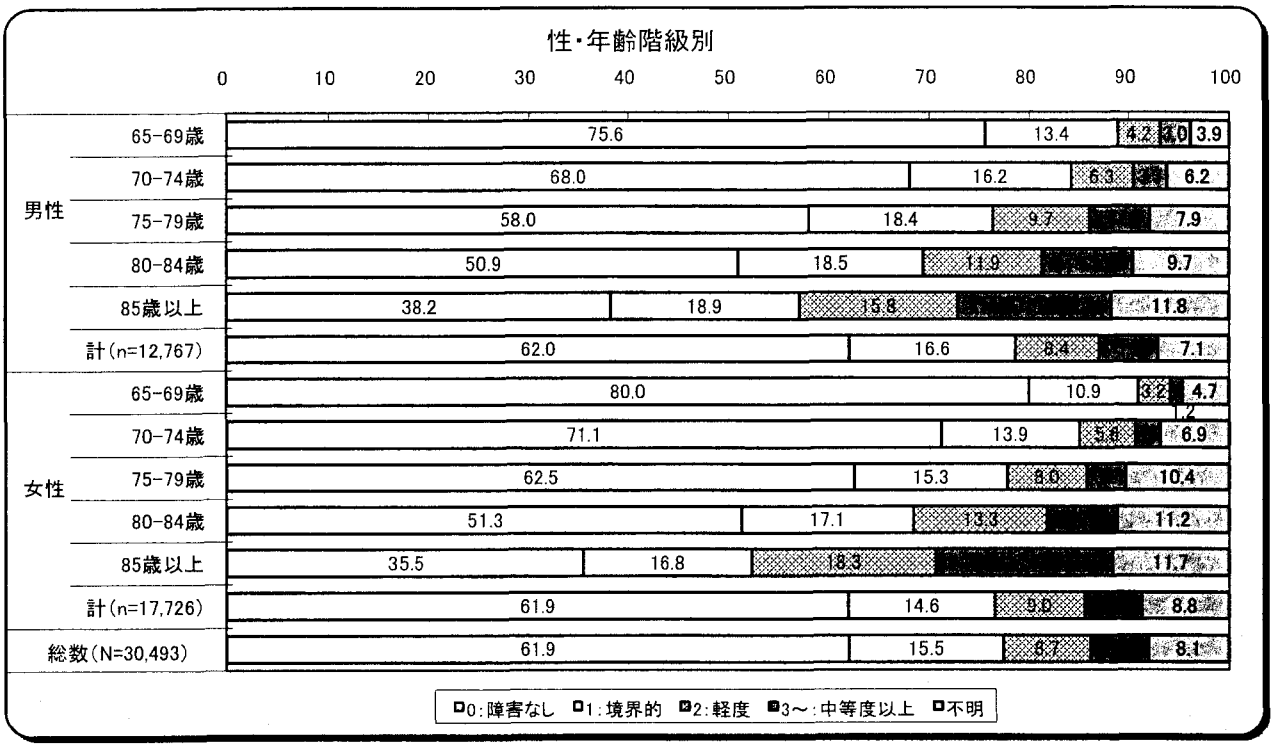
図表　認知機能の障害程度の評価方法



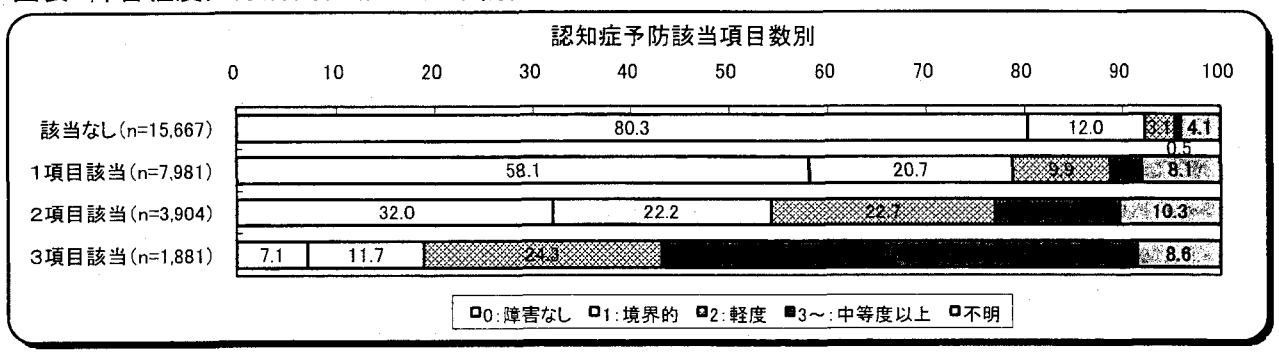
④リスク状況

●評価結果をみると、１レベル以上の障害程度と評価されるリスク者の割合は、全体で30.0%、男性30.9%、女性29.4%で、男女ではほとんど差がない結果となった。年齢別にみると、やはり年齢が上がるほどリスク者割合が高くなっている。
●基本チェックリストの認知症予防に関する各設問の該当項目数ごとに、障害程度区分別の構成割合をみると、該当項目数が多くなるほど２レベル、３レベル以上が多くなっている。認知症予防の評価で３項目該当する場合は、90%以上が１レベル以上の認知機能の障害あり（不明を除く。）という結果となっている。

図表　障害程度区分別割合（性・年齢階級別）



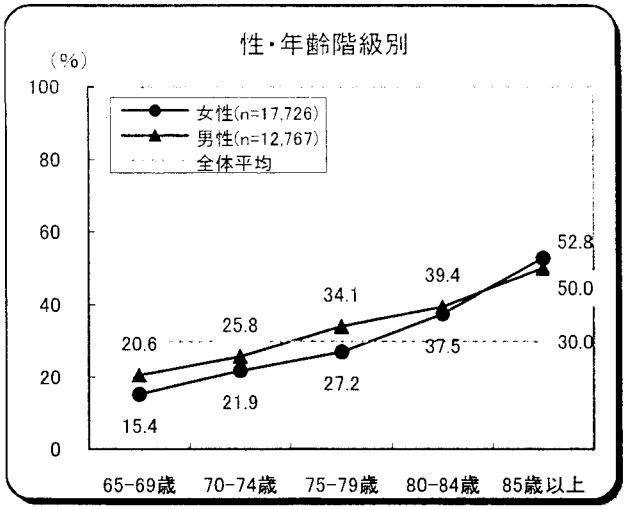
図表　障害程度区分別割合（認知症予防該当項目数別）

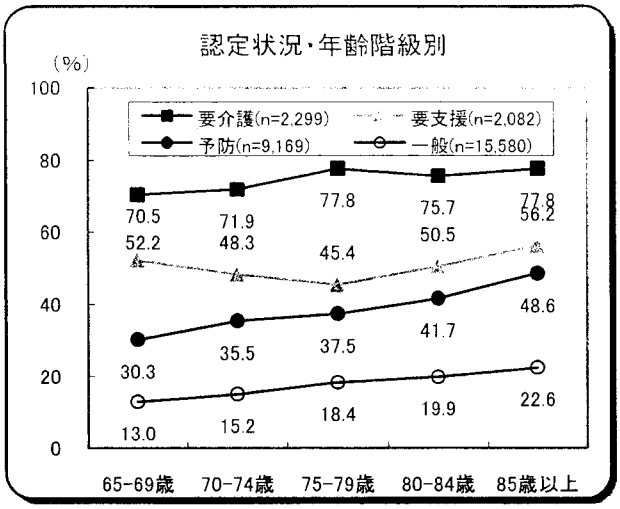


※認知症予防判定が不明な者を除く。

●認定状況別にリスク者割合をみると、要介護認定者が76.4%で最も高く、次いで要支援認定者（51.1%）、二次予防対象者（38.6%）、一般高齢者（16.2%）の順となっている。認知症予防の評価結果と同様、要支援認定者と二次予防対象者の差が比較的小さくなっている。

図表　リスク者割合（性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別）





⑤回答状況

●設問に対する回答結果を認定状況別に比較してみると、認定者の該当率が50%超えている設問が2問（問5-5・6）、非認定者の非該当率が80%を超えている設問が4問となっている。各設問とも要介護認定者と要支援認定者で該当率に大きな差がみられる。

図表　回答結果（認知機能障害）

単位：%

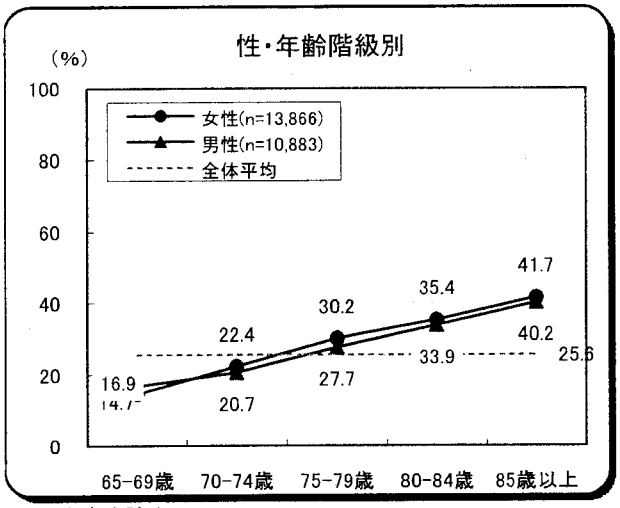
設問（カウントする回答）	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)		特異度
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)	
問5-4　5分前のことが思い出せますか（いいえ）	10.2		35.2		(89.8)
	7.7	14.4	21.5	47.9	
問5-5　その日の活動を自分で判断できますか（いくらか困難であるができる～ほとんど判断できない）	12.2		61.1		(87.8)
	5.4	23.9	42.5	78.2	
問5-6　人に自分の考えをうまく伝えられますか（いくらか困難であるが伝えられる～ほとんど伝えられない）	17.3		56.6		(82.7)
	9.7	30.1	42.7	69.4	
問6-6　食事は自分で食べられますか（一部介助があればできる、できない）	1.1		22.0		(98.9)
	0.2	2.5	7.8	34.9	

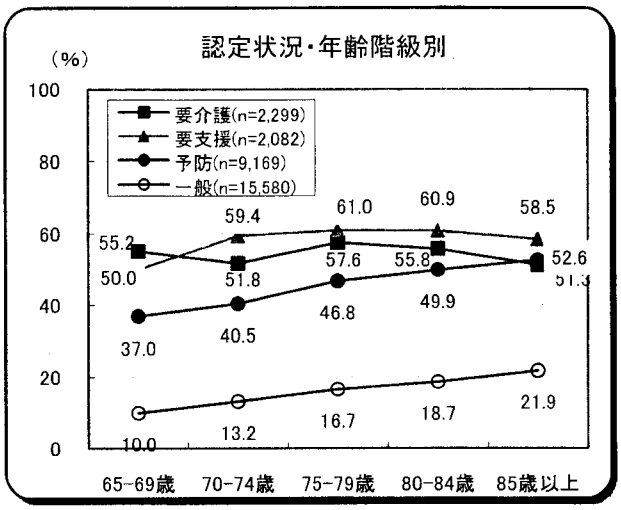
(7) うつ予防

①該当状況

●基本チェックリストにおけるうつ予防の該当状況をみると、認定者を除く全体で25.6%（男性24.6%、女性26.4%）となっており、年齢が上がるほど該当者割合が高くなっているものの、男女差は比較的小さくなっている。
●認定状況別にみると、一般高齢者14.1%、二次予防対象者45.6%、要支援認定者59.5%、要介護認定者53.7%と、要支援認定者のほうが要介護認定者より該当者割合が高くなっているが、これは要介護認定者の一部無回答による不明が要支援認定者より10ポイント以上高いことが影響しているものと考えられる。
●うつ予防についても、二次予防対象者と要支援認定者で該当者割合に大きな開きはみられない。

図表　該当者割合（性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別）





※認定者を除く。

②回答状況

●設問に対する回答結果をみると、認定者の該当率は43.8%～63.2%、非認定者の非該当率は71.3%～86.9%で、高齢者の生活機能のレベルと関連する指標として有効なことがうかがえる。一般高齢者と二次予防対象者で該当率に比較的大きな差があることが特徴的になっている。
●関連する設問として主観的健康感についてみると、認定者では「（あまり）健康でない」との回答が67.3%（不健康群）、非認定者で「（とても・まあまあ）健康である」との回答が75.4%（健康群）となっている。

図表　回答結果

単位：%

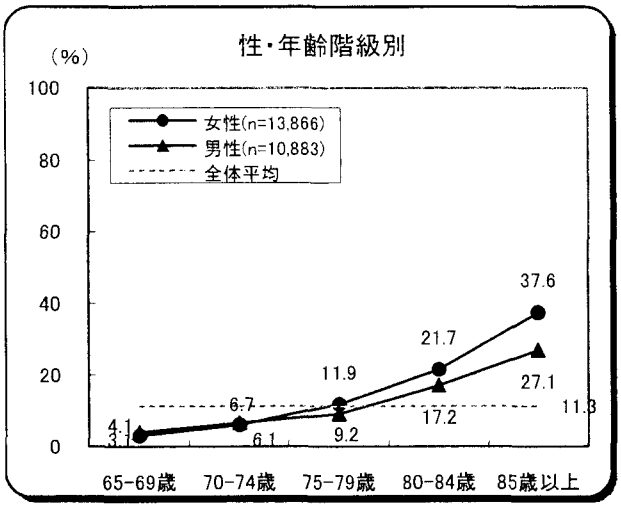
設問（該当する回答）	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)		特異度
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)	
問8-7 （ここ2週間）毎日の生活に充実感がない （はい）	16.6		47.2		(83.4)
	9.6	28.7	44.4	50.0	
問8-8 （ここ2週間）これまで楽しんでやれていたことが楽しめなくなった （はい）	13.1		43.8		(86.9)
	5.6	26.2	40.2	47.4	
問8-9 （ここ2週間）以前は楽にできていたことが、今ではおっくうに感じられる （はい）	26.8		63.2		(73.2)
	14.3	48.3	63.4	62.9	
問8-10 （ここ2週間）自分が役に立つ人間だと思えない （はい）	20.2		50.9		(79.8)
	13.2	32.2	48.0	53.8	
問8-11 （ここ2週間）わけもなく疲れたような感じがする （はい）	28.7		58.3		(71.3)
	16.7	49.3	58.7	57.9	
＜関連設問＞					
問8-1 普段、ご自分で健康だと思いますか （あまり健康でない、健康でない）	24.6		67.3		(75.4)
	12.9	44.5	66.4	68.2	

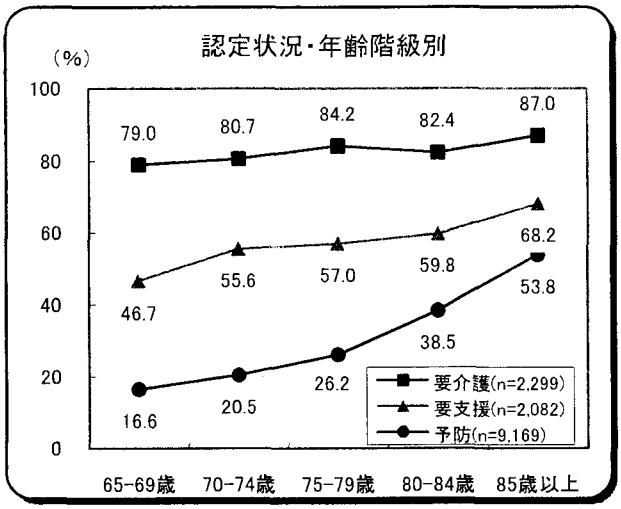
(8) 虚弱

①該当状況

●基本チェックリストで、うつ予防に関する５項目を除いた20項目中、10項目以上が該当した場合、二次予防該当者となる（虚弱）。
●この該当者割合をみると、認定者を除く全体で11.3%（男性9.7%、女性12.6%）で、年齢とともこの割合が高くなっている。
●認定状況別にみると、二次予防対象者30.6%、要支援認定者61.0%、要介護認定者84.5%となっている。

図表　該当者割合（性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別）





※認定者を除く。

②回答状況

●20項目のうち、他の評価項目に含まれない５項目についてそれぞれの回答結果をみてみると、一般高齢者、二次予防対象者、要支援認定者、要介護認定者で該当率に顕著な差がみられる。
●認定者の該当率は66.0%～85.6%、非認定者の非該当率は70.1%～82.7%で、これらの設問が高齢者の生活機能レベルを示す設問として有効なことがわかる。

図表　回答結果

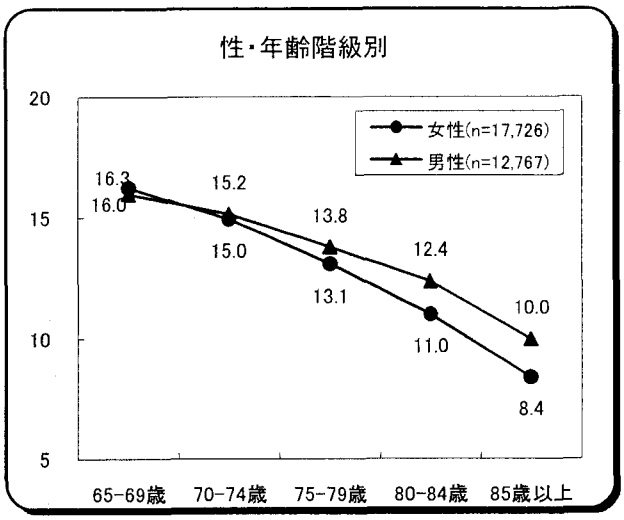
単位：%

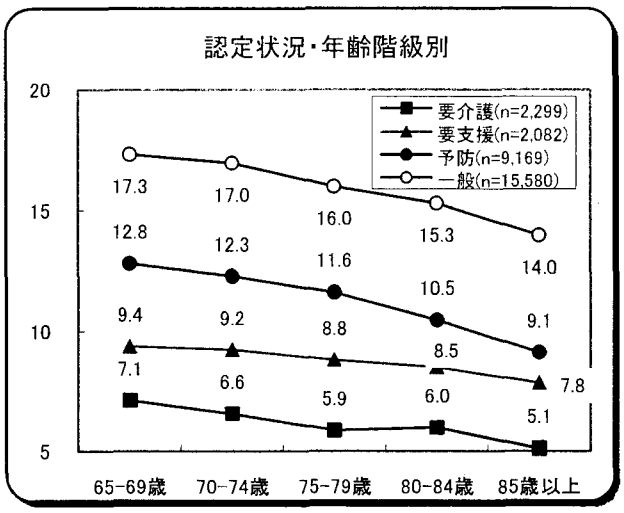
設問（該当する回答）	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)		特異度
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)	
問6-1　バスや電車で一人で外出していますか（「できるけどしていない」または「できない」）	24.5		85.6		75.5
	15.2	40.2	75.2	94.9	
問6-2　日用品の買物をしていますか（「できるけどしていない」または「できない」）	18.0		77.9		82.0
	10.4	30.9	62.5	91.6	
問6-5　預貯金の出し入れをしていますか（「できるけどしていない」または「できない」）	22.1		70.2		77.9
	17.0	30.7	49.5	89.0	
問7-5　友人の家を訪ねていますか（いいえ）	29.9		79.9		70.1
	22.1	43.3	69.2	89.6	
問7-6　家族や友人の相談にのっていますか（いいえ）	17.3		66.0		82.7
	11.0	28.0	51.1	79.4	

③基本チェックリスト得点

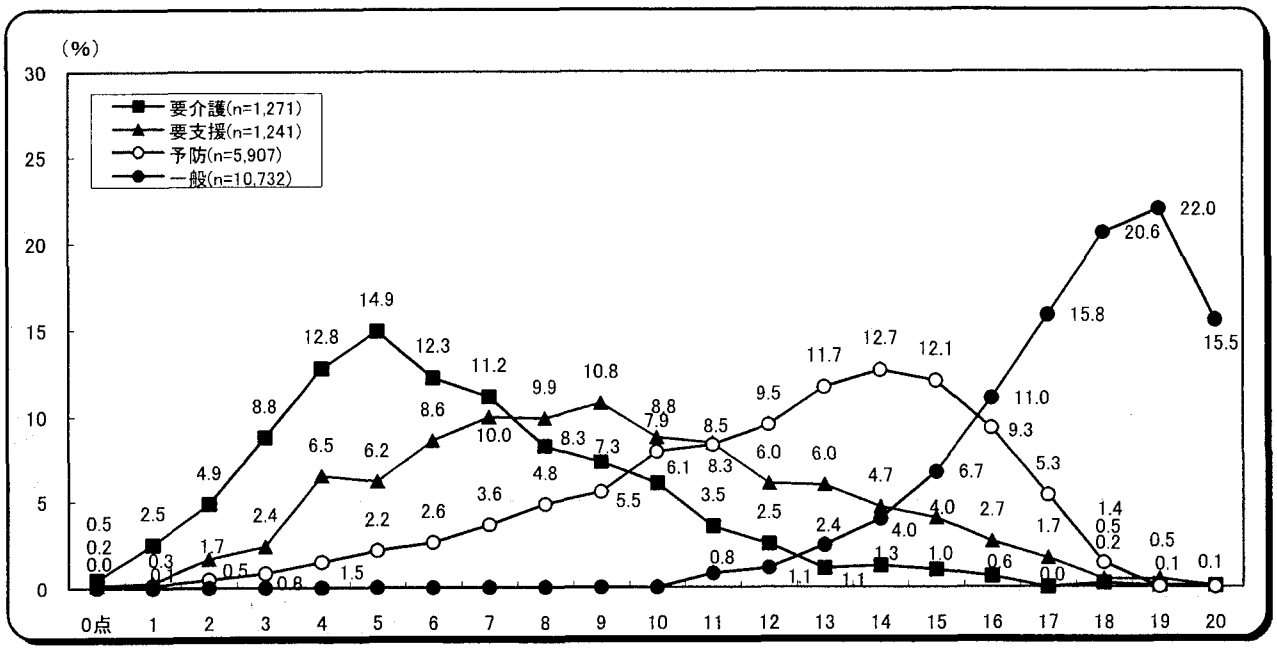
●この基本チェックリスト20項目について、それぞれ該当しない回答をした場合を１点として、その合計得点の平均を求めたのが下の図表となっている。男女とも年齢が上がるほど平均得点が下がっているが、女性のほうがその低下幅が大きくなっている。
●認定状況別にみると、最も高いのが一般高齢者で、次いで二次予防対象者、要支援認定者、要介護認定者の順で、それぞれの生活機能のレベルを反映した結果となっている。
●20項目すべてに回答のあった者のこの得点の相対度数分布をみると、要介護認定者で４点、要支援認定者９点、二次予防対象者14点、一般高齢者19点がそれぞれ分布のピークになっている。

図表　基本チェックリスト平均得点





図表　基本チェックリスト得点の相対度数分布

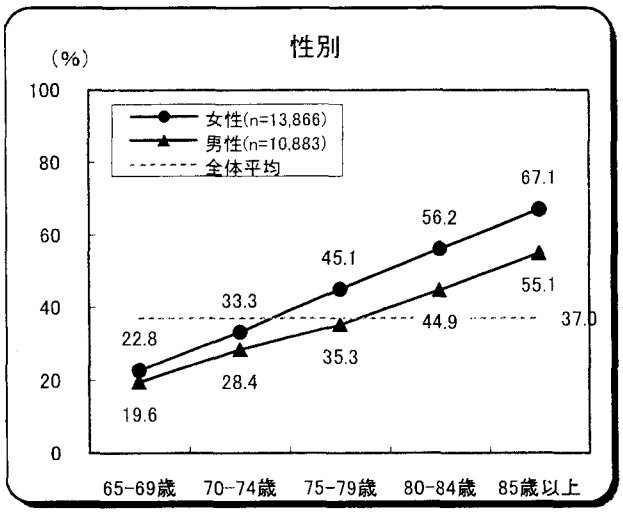


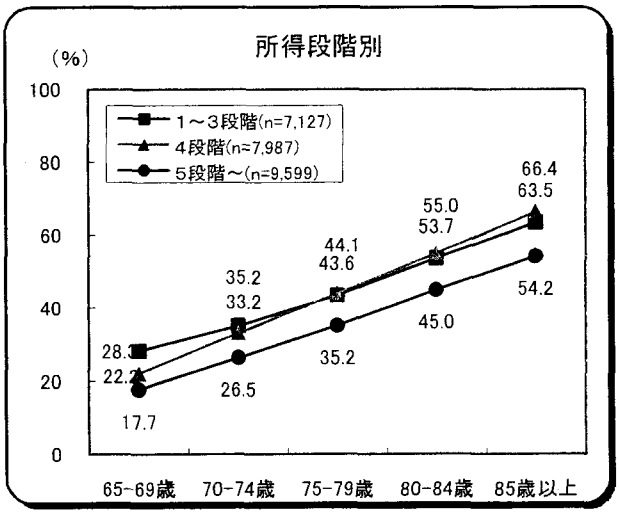
(9) 二次予防対象者

①該当状況

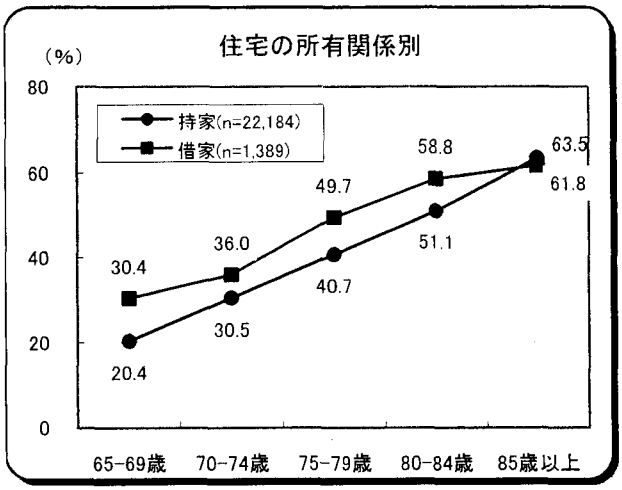
●二次予防対象者については、運動、口腔など、複数の評価項目で重複して該当している場合があるため、こうした重複を除いて該当者割合を求めたのが下の図表となっている。
●該当者割合は、認定者を除く全体で37.0%（男性32.2%、女性40.9%）で、女性のほうが高くまた年齢が上がるほどその差が開く傾向がみられる。
●所得段階別では第５段階以上で、住宅の所有関係別では持家で、世帯構成別では夫婦二人暮らしで、それぞれ該当者割合が低くなっており、こうした属性をもつ高齢者では比較的生活機能が高い高齢者が多いことがうかがえる。
●逆に所得段階が第４段階以下、借家、配偶者以外と二人暮らしといった高齢者では生活機能の低下している高齢者が多いことがうかがえる。

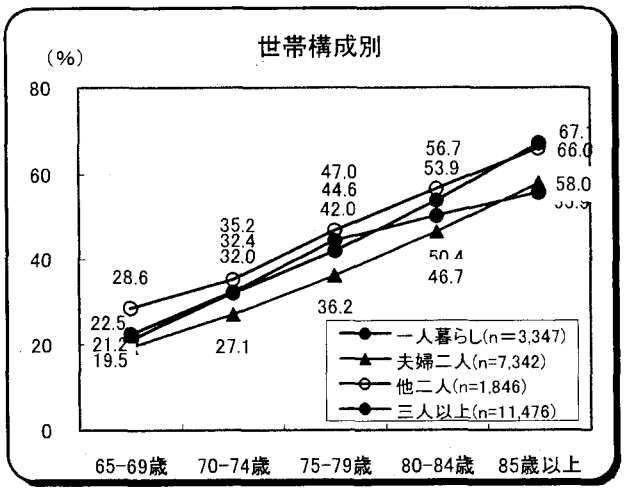
図表　該当者割合（性別、所得段階別、世帯構成別、住宅の所有関係別）





※認定者を除く。





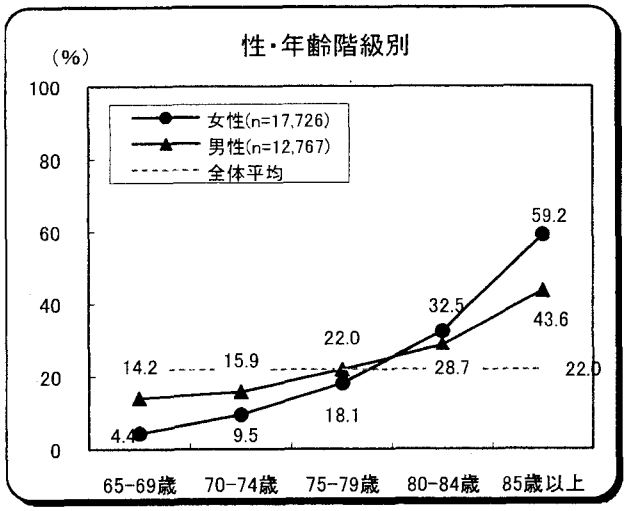
2 日常生活

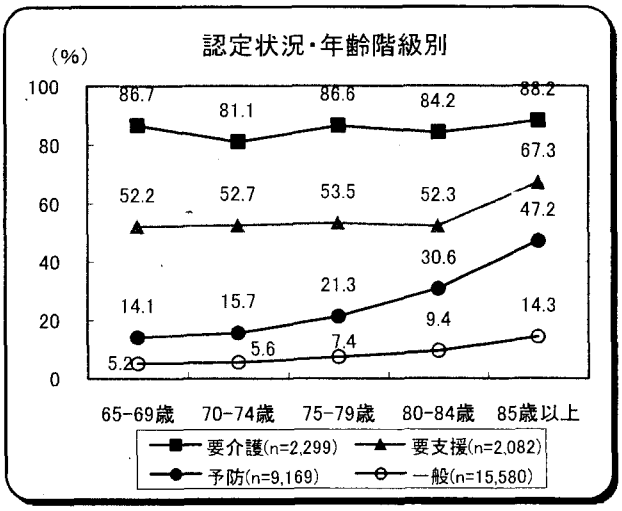
(1) 手段的自立度(IADL)

①評価結果

●本調査では、高齢者の比較的高次の生活機能を評価することができる老研式活動能力指標に準じた設問が設けられている（問6-1～5、問7-1～6・8・9）。
●このうち、手段的自立度（ＩＡＤＬ）については、各設問に「できるし、している」または「できるけどしていない」と回答した場合を1点として、5点満点で評価し、5点を「高い」、4点を「やや低い」、3点以下を「低い」として評価している。
●4点以下を低下者とした評価結果をみると、70歳代までは男性のほうが低下者割合が高くなっているが、80歳以上では逆に女性のほうが高くなっている。
●認定状況別にみると、やはり最も低下者割合が最も高いのは要介護認定者で、次いで要支援認定者、二次予防対象者、一般高齢者の順となっている。

図表　低下者割合(性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別)





②回答状況

●評価の基礎となっている５項目についてそれぞれの回答結果をみてみると、一般高齢者、二次予防対象者、要支援認定者、要介護認定者でその回答結果に顕著な差がみられる。
●非認定者の得点カウントする選択肢を選んだ割合（カウント率）は91.5%～95.5%、非認定者のカウント率は25.4%～49.2%で、これらの設問が高齢者の生活機能レベルの指標として有効なことがうかがえる。
●老研指標は本人ができるかどうかという能力に関する設問であるが、一部設問内容が重複する基本チェックリストは実行状況に関する設問になっている（問6-1･2･5が重複）。手段的自立度に関する設問で能力と実行状況の差をみると、食事の用意について非認定者でその差が25.0%と比較的大きくなっている。

図表　回答結果

単位:%

設問(得点カウントする回答)	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)		差
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)	
問6-1　バスや電車で一人で外出していますか (「できるし、している」または「できるけどしていない」)	91.5		25.4		66.1
	97.6	81.1	40.7	11.8	
問6-2　日用品の買物をしていますか (「できるし、している」または「できるけどしていない」)	95.2		37.8		57.4
	99.1	88.5	58.5	19.4	
問6-3　自分で食事の用意をしていますか (「できるし、している」または「できるけどしていない」)	91.5		40.1		51.4
	95.3	85.0	63.9	18.7	
問6-4　請求書の支払いをしていますか (「できるし、している」または「できるけどしていない」)	95.5		49.2		46.3
	98.7	90.0	75.3	25.9	
問6-5　預貯金の出し入れをしていますか (「できるし、している」または「できるけどしていない」)	94.6		46.5		48.1
	97.9	88.8	71.2	24.0	

図表　回答結果（能力と実行状況の差）

単位：%

設問（回答）	非認定者(n=24,749)		認定者(n=4,381)	
	一般 (n=15,580)	二次予防 (n=9,169)	要支援 (n=2,082)	要介護 (n=2,299)
問6-1　バスや電車で一人で外出していますか	15.9		11.0	
（できるけどしていない）	12.8	21.3	15.9	6.7
問6-2　日用品の買物をしていますか	13.1		15.7	
（できるけどしていない）	9.5	19.4	21.0	11.0
問6-3　自分で食事の用意をしていますか	25.0		12.1	
（できるけどしていない）	25.8	23.7	16.9	7.8
問6-4　請求書の支払いをしていますか	15.7		14.6	
（できるけどしていない）	13.9	18.8	18.1	11.6
問6-5　預貯金の出し入れをしていますか	16.6		16.7	
（できるけどしていない）	14.9	19.5	20.7	13.0

(2) 生活機能総合評価

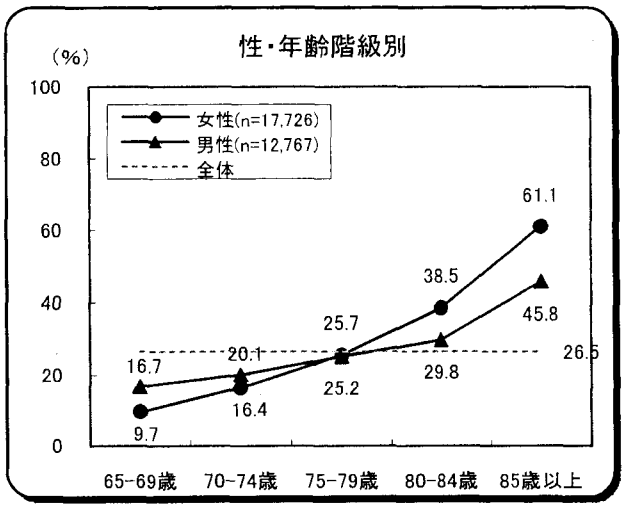
○生活機能低下者割合

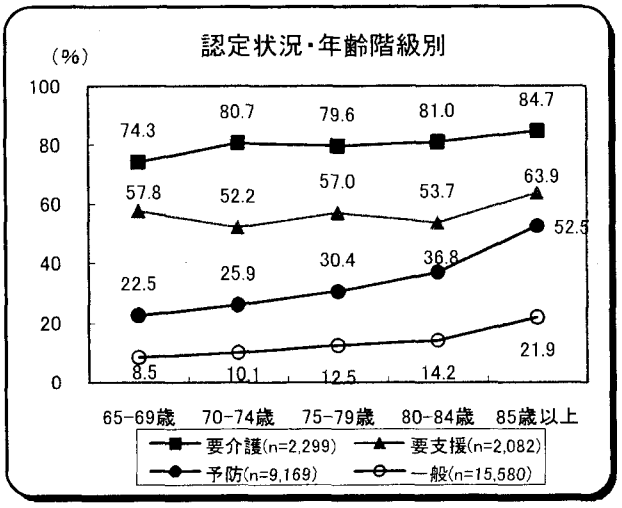
●この手段的自立度に、知的能動性、社会的役割を加えた老研指標13項目での評価結果は、以下のとおりとなっている。評価は、13点満点で評価し、11点以上を「高い」、9、10点を「やや低い」、8点以下を「低い」として評価している。

●10点以下を低下者とした結果をみると、70歳代前半までは男性のほうが低下者割合が高くなっているが、70歳の後半からは逆に女性のほうがその割合が高くなっている。

●認定状況別にみると、やはり最も低下者割合が最も高いのは要介護認定者で、次いで要支援認定者、二次予防対象者、一般高齢者の順となっている。

図表　生活機能低下者割合（性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別）





(3) 日常生活動作(ADL)

①設問と評価

●今回の調査では、認定者が調査対象に含まれていることもあり、日常生活動作（ＡＤＬ）に関する設問が項目として含まれている。
●内容としては、食事、移動、整容、トイレ動作、入浴、歩行、階段昇降、着替え、排便、排尿の10項目で（問6-6～16）、ＡＤＬ評価指標として広く用いられているバーセルインデックスに準じた設問内容となっている。
●各設問ごとの配点は、バーセルインデックスの評価方法に従って、各設問で自立を5～15点とし10項目の合計が100点満点となるよう評価している。

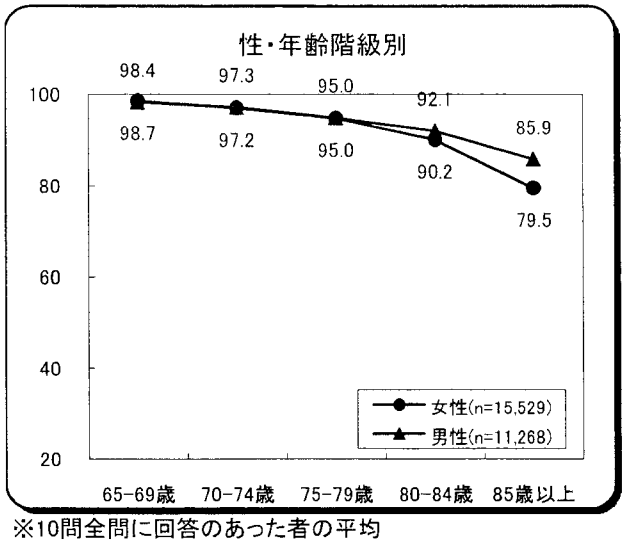
図表 ADLの評価方法

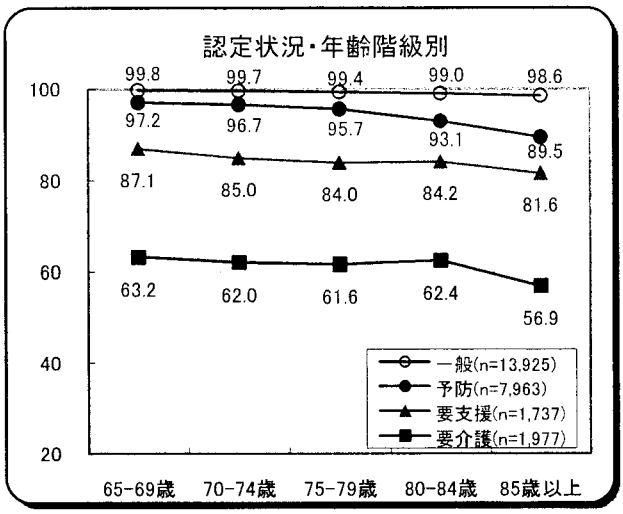
問番号	項目	配点	選択肢
問6-6	食事	10: 5: 0:	「1. できる」 「2. 一部介助(おかずを切ってもらうなど)があればできる」 「3. できない」
問6-7	ベッドへの移動	15: 10: 5: 0:	「1. 受けない」 「2. 一部介助があればできる」 「3. 全面的な介助が必要」 (問6-8の回答が「1. できる」「2. 支えが必要」の場合) 「3. 全面的な介助が必要」 (問6-8の回答が「3. できない」の場合)
問6-9	整容	5: 0:	「1. できる」 「2. 一部介助があればできる」または「3. できない」
問6-10	トイレ	10: 5: 0:	「1. できる」 「2. 一部介助(他人に支えてもらう)があればできる」 「3. できない」
問6-11	入浴	5: 0:	「1. できる」 「2. 一部介助(他人に支えてもらう)があればできる」または「3. できない」
問6-12	歩行	15: 10: 0:	「1. できる」 「2. 一部介助(他人に支えてもらう)があればできる」 「3. できない」
問6-13	階段昇降	10: 5: 0:	「1. できる」 「2. 介助があればできる」 「3. できない」
問6-14	着替え	10: 5: 0:	「1. できる」 「2. 介助があればできる」 「3. できない」
問6-15	排便	10: 5: 0:	「1. ない」 「2. ときどきある」 「3. よくある」
問6-16	排尿	10: 5: 0:	「1. ない」 「2. ときどきある」 「3. よくある」

②評価結果

●ＡＤＬの合計得点の平均値を、性別、認定状況別にみると、80歳以上、特に女性で平均得点が低下している。
●認定状況別では、要介護認定者の平均得点が60点前後、要支援認定者が80点台の前半と、認定者で機能低下が顕著になっていることがわかる。70歳代までは一般高齢者と二次予防対象者でＡＤＬの平均得点に大きな差がみられない。

図表　ADL平均得点（性・年齢階級別、認定状況・年齢階級別）



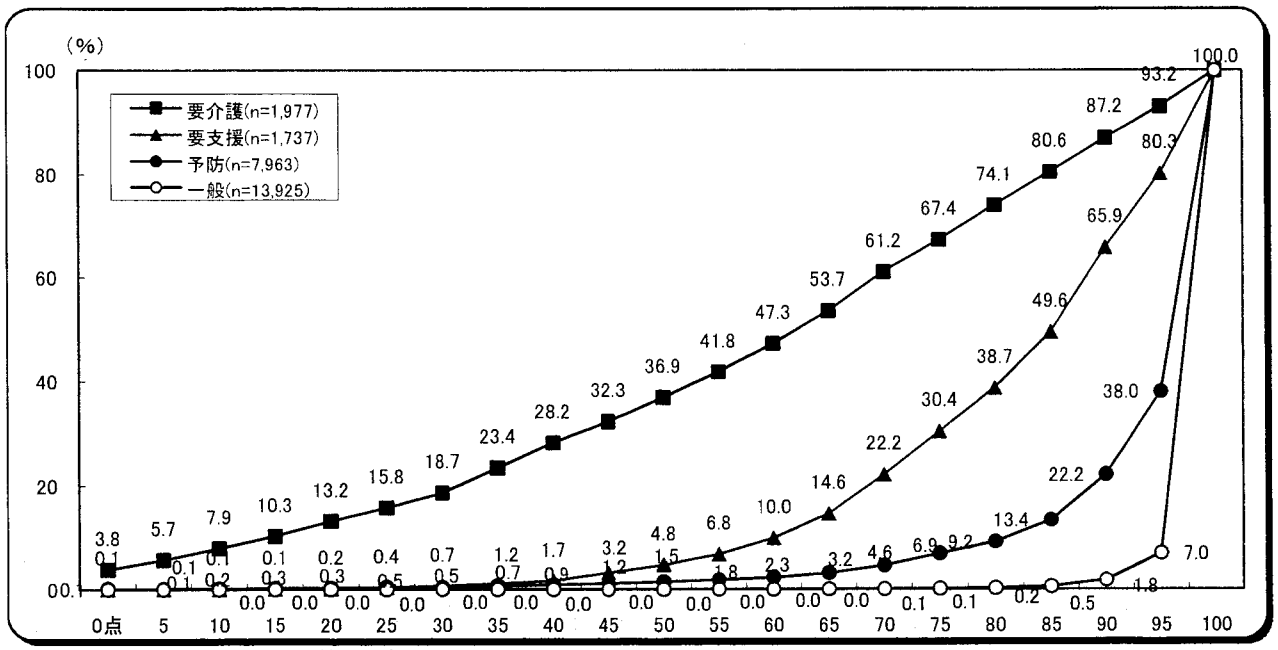


※10問全問に回答のあった者の平均

③ADL得点累積相対度数

●ＡＤＬ合計得点について、関連する設問すべてに回答のあった者について、認定状況別に累積相対度数をみてみると、要介護認定者では高得点から低得点まで得点が分散しているため、ほぼ直線状の分布となっている一方、二次予防対象者、一般高齢者では95点以上が過半数を占めるため、Ｌ字型の分布となっている。要支援認定者はその中間に位置している。

図表　累積相対度数



※ADLに関連する全設問に回答した者のみ